

Title	アメリカ英語の綴字発音
Author	中郷, 安浩
Citation	人文研究. 19 卷 7 号, p.498-512.
Issue Date	1968
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

アメリカ英語の綴字発音

中 郷 安 浩

皮肉屋としても有名な George Bernard Shaw (1855—1950) が *ghoti* を *fish* と読む、すなわち *gh* は *enough* の [f], *o* は *women* の [ɪ], *ti* は *nation* の [ʃ] であると言ったのは有名な話である。これは、英語では、綴字と発音とが必ずしも一致しないという話をするときによく持出される例でもある。事実、綴字と発音のずれは、現代英語においては、非常に大きく、英米で色々発音辞典が出版され、それが一つの厳然たる権威を有しているということもそれを裏書きしていると言える。また、英語辞典には必ずと言っていいほど、何らかの型で発音が表記されており、語義や語法を知るための辞書としてではなく、発音辞典としての役割をも果している。英語がもしもドイツ語のようにかなり綴字と一致する発音をする言語であれば、発音辞典の重要性はずい分小さくなるはずである。

表記法、さらにイギリスとアメリカの違いを考慮すると若干の差異はあるが、今ここで、現代英語には24の子音、2つの二重子音、16の単母音と9つの二重母音があるとしてみると、合計51の音があることになる。それに対してアルファベットは26文字である。非発音的にならざるを得ないのは当然である。この割合だと平均すれば1文字に2音ということになるが、実際はそんなに少ないものではない。現在、英語では51音に対して約450通りの綴り方があると言われる。すなわち、1音に対して平均9個の綴り方があることになる。しかし、これはあくまでも平均であって、実際に調べてみると、音によって、9通り以上の綴り方を持っているものもあれば、それ以下のものもある。[ɪ]のごときは、実に14以上の綴りを持っている。しかし、英語の始めからこのように綴字が非表音的であったわけではない。OEの綴字法はかなり表音的であった。OEには14の単母音と6つの二重母音、24の子音とがあったと考えられているが、それに対して文字は23のラテン文字、2つのルーン文字、それに *eth* を加えて26個なのだから、勿論完全に表音的であったわけではない。しかし、今日よりははるかに表音的であったことは想像に難くない。それが今日のように非表音的となったのには主なる原因が3つ考えられる。

第1に、英語はその発達の途中に数個の新しい音を生んだ。OE初期には [ʃ], [ʒ] はなく, [ə], [ʌ] などなかったと考えられる。これらの音が現われた

際、それらに対するアルファベットを作らなかった。

第2に、外国語が多数借入されたことがあげられる。フランス語やドイツ語とちがって、英語は借入語 (loan words) の何国語たるを問わず、その原語音を採用したばかりでなく、常にその綴をも同時にそのまま取り入れた。

第3に、英語の音変化が一様でなかった。例えば OE の ea [ɛ:ə] は3つの音に別れて発達した。しかも、印刷術の発達は英国国民の保守性と相まって、綴字の固定化をもたらすこととなった。

以上のほかに、同化 (assimilation)、異化 (dissimilation)、脱落 (elision) などの現象や、現代英語が音節 (syllable) のリズムよりはむしろ強勢 (stress) のリズムによる言語であるために、強勢の弱い音はあいまい音化するか失われるという事実が混り合って、今日のような綴字と発音のずれを生むこととなり、その中で発音を綴字に合せようとする試みが繰返された。

このようなずれがある言語には綴字発音が起りやすい。Cirencester という地名をはじめ綴で見た人で、いきなりこれを ['sɪsɪ(s)tə(r)] あるいは ['sɪzɪtə(r)] と読むことの出来る人はまずないであろう。綴字通りに ['særən, sɛstə(r)] と読むにちがいない。

綴字発音が行われやすいのは、まず伝統的発音を知らない人から始まり、それがだんだんと社会的に伝播されて行く場合が最も多いであろう。伝統的発音と綴字を知らない人は教養の低い人が多い。だからと言って、綴字発音が教養の程度を示す基準になるとは限らない。立派に教養を備えた人達から綴字発音が生れることも稀ではない。伝統的発音を知ってはいるが、それが綴字とあまりにもかけ離れていて、自分が伝統的発音を使えば、綴字を知らないからそんな発音をするのだと他人に思われるのを怖れて、綴字の知識をひけらかさんが為綴字発音を行う人もある。あるいは、伝統的発音が一種のくだけた型であって、綴字通りに発音することこそ折目正しい言葉づかいであるとかたくなに主張し、他人にもそれを要求する人々もある。これは18世紀のイギリスによくあったことで、アメリカでは今でも小学校の先生や牧師などによく見られることである。また、アナウンサーなどは、明確に発音しようとするあまりに綴字発音を行い、不自然にしてしまうこともある。これらは発音上の「上品過多語法」(Hyper-urbauism) とも言えるものである。¹綴字発音は、その初期においては正しいものではない。しかし、それが個人から社会へと広まり、多くの人々がそれをを用いるようになるにつれて disputable から acceptable へ、そして established へと昇進して行くのである。

一口に綴字発音と言っても色々な段階がある。そして、綴字発音の方が伝統的発音よりも優勢になり、ついにはそれを駆逐してしまう例も少なくない。

Alexander Gill (1564—1635) は教養ある人たちがそうするからと言って *folk* や *fault* の *l* を発音することを好み、Shakespeare は *calf* や *half* の *l* ばかりか、*neighbour* の口蓋摩擦音 (Palatal fricative) を発音しない Holofernes の *pedantry* を皮肉り、Noah Webster は *American Spelling Book* (1783) で2音節語や多音節語を綴字通りに発音することを説き、Samuel Worcester は *Third Book of Reading and Spelling* (107th edn., Boston, 1848) 等で *clothes*, *fortune*, *several*, *were* をそれぞれ *close*, *fort'n*, *several*, *ware* と発音することを否として、*creature*, *nature* を *heat your*, *hate your* と押韻するように言った。そしてとくに18世紀以後はこれを強調し、演説家は正確さと明確さの名のもとにそれに従ってきたのである。しかし、綴がこうなっているから、発音もこうでなければいけないという論法で行くと *clerk* は *er* であるから [klɜ:k] ということになる。しかしそれは主客転倒で、発音が [ɑr] であるから、むしろ *clark* としなければならないと言うべきもので、もともと [er] で後に [ɑr] となった *star*, *curve*, *smart*, *farm* 等は事実発音によって綴字がかわっているのである。³

アメリカにおける綴字発音について Krapp はこの *eye-standard* の優勢をアメリカにはイギリスのような標準国語というものが確立した型で存在しないせいであるとしている。⁴ それも一因ではあろう。これには人種のるつぼと言われ、実に種々雑多な民族からなる特殊な国アメリカという事実も含まれているだろう。しかし、主としてこの責任は綴字発音を強制してきた教師や説教師あるいは一般の演説家が負うべきであり、その責任は現在ではラジオや TV のアナウンサーにも負わされるべきであるという学者もある。⁵

綴字発音の影響を受けやすい語はあまり日常的でない語に多い。変った地名や人名に多いのはこのためである。ある特定の職業の人達が常に用いる語は、その *community* の中では伝統的発音が保持されるが、一般社会の中でその語を日常用いることが少ければ、そこでは綴字発音が行われやすい。海洋語がその例である。ところが、日常用いる語となれば、伝統的発音が保たれるわけであるから、綴字発音の入り込む余地はそれだけ少くなる。このように使用頻度にも関係してくるので、どのような場合に綴字発音が行われるかを一口に言うことは出来ない。しかし、綴字発音が一種の類推であり、類推が類推を呼ぶことを考えれば、よく似た綴字には同数の綴字発音が行われる可能性が多いことがわかる。事実、孤立した綴字発音もあるにはあるが、ある程度の傾向を記述することは可能で

ある。

題目の「アメリカ英語の綴字発音」というのは、アメリカだけに行われる綴字発音という意味ではないことをことわっておかねばならない。イギリス英語と重なって現れるものも多い。以下 AE とあるのはアメリカ英語を、BE とあるのはイギリス英語を指す。発音表記は Kenyon-Knott⁶ 方式と呼ばれるものに従っている。⁷

I 伝統的発音では黙字である綴字が発音されるもの

(1) b

(a) 綴字 *t* の前に *b* があるとき、たとえば *debt*, *doubt*, *redoubt*, *subtle*, やそれらの派生語 *debtor*, *undoubtedly*, *subtlety* 等においては *t* の前の *b* は黙字である。しかしながら同類の *subtile*, *subtilize*, *subtilty* 等は、AE では伝統的発音 [ˈsʌtl̩], [ˈsʌtl̩, arz], [ˈsʌtl̩tɪ] と並んで綴字発音 [ˈsʌbtl̩], [ˈsʌbtl̩, arz], [ˈsʌbtl̩tɪ] が行われる。歴史的にはこれらの語はフランス語から英語に *b* のない形で入って来たものが、ラテン語源であることを示すために後に綴字 *b* を加えるようになったものである。これらは BE では *b* を発音しない伝統的発音である。この点では AE では綴字発音がかなり進んでいて優勢になる気配が感じられる。

(b) *mb* が語尾に来る場合も *b* は黙字である。しかし Kenyon-Knott によると AE では *iamb* は [ˈaɪæmb] のみ、*rhomb* は [rʌmb] と [rʌm], *rhumb* は [rʌm] と [rʌmb] を持ち綴字の影響が見られる。一方 Jones⁸ によると BE では *iamb* については伝統的発音と綴字発音が共存し、*rhomb* と *rhumb* は伝統的発音のみである。いずれも比較的新しく英語化した語で、専門語あるいは頻度数の少ない語である。

(2) c

(a) 歴史的には *perfect*, *verdict* の *c* は発音されなかった。フランス語から *parfit*, *verdit* という形で英語に入り、ラテン語源であることを示すために後に再び *c* が加えられたのである。⁹ *Arctic* も同様な歴史があり、BE では伝統的発音はほとんど行われぬ。しかし AE では [ˈɑrktr̩k] が優勢ではあるが、伝統的な [ˈɑtr̩k] も行われている。だがこれは Kenyon-Knott も *now rare* という但し書きをつけているほどで、やがてこの伝統的発音も綴字発音の波にの

まれて消えて行く運命にあると思われる。ただし, *indict* は今でも英米ともに [ɪn'daɪt] である。

(b) *Connecticut* は BE で綴字発音が行われる。¹⁰ AE では綴字発音の入りこむ余地はないであろう。

(3) ch

(a) これが黙字となるのは *drachm*, *fuchsia*, *yacht* だけである。このうち, *fuchsia* のみに AE では綴字発音 [ˈfʊksɪə] が起り得る。*Drachm* はその [dræm] という発音ゆえに英米ともに *dram* という綴字が用いられ, それが確立しているから, *drachm* なる綴字の方がすたれて行き, 歴史的発音が保持されることになる。*Yacht* は子供でも知っている語だけに, 綴字発音はまず考えられない。

(4) d

(a) *Sandwich* は AE では固有名詞, 普通名詞ともに [ˈsændwɪtʃ] が優勢である。BE では固有名詞に [ˈsænwɪtʃ] が, 普通名詞に [ˈsænwɪdʒ] 又は [-tʃ] が優勢で, 固有名詞の場合のみ *d* が発音されることがある。

(b) *Jones* では (初版から最新版に至るまで) the less frequent form として [] に入られている *Wednesday* の綴字発音 [ˈwɛdnɜːdɪ] は AE では行われていないようであり, 今後も綴字発音が伝統的発音をしのぐことになることはないであろう。

(5) f

(a) *Halfpenny*, *halfpence* は英米ともに [ˈheɪp(ə)nɪ], [ˈheɪp(ə)ns] であって, 綴字発音は認められていない。ただし *Jones* によると, BE では固有名詞 *Halfpenny* は綴字通りに発音する。

(6) g

(a) 綴字 *g* は語尾の *m* または *n* の前にある場合と *gn* が語頭にある場合には黙字であるのが原則である。そのうちでただ一つ the less frequent form として BE で認められている *gneiss* の [ɹnars] は AE では認められていないから, 本来黙字であるところの *g* に綴字発音を与えることは AE では皆無と言うことができる。

(7) h

(a) フランス語系の語においては AE の方が BE よりも伝統的発音を保持していると言える。¹¹歴史的に言えば、英語が OF を借入した時には、フランス語ではすでに *h* を発音していなかった。英語でフランス語系の語の *h* を綴字に従って発音するようになったのは18世紀である。そこで、*heritage, hospital, humble, host, horizon, hermit* などはずべて綴字発音とすることができる。ところが、*hour, honest, honor, heir* などは頻度が高いため現在でも黙字のままで残っている。*Habit, horror, homage* なども *h* を発音するようになったのはそんなに古いことではない。AE には *h* を発音しない伝統的発音を発音する綴字発音が両方認められているものに *herb, hostler, homage, humor* がある。BE では *herb, homage* が *h* のある発音のみ可、*hostler* は *h* のない発音、そして *humor* は *h* のある発音が普通で *h* のない発音は old fashioned である。逆に *hotel* は AE では綴字発音 [hou'tel] のみで、BE は [ou'tel, ə'tel] も有する。

(b) 強勢のない音節の *h* は落ちることが多い。たとえば *forehead* [ˈfɑːrɪd], *shepherd* [ˈʃɛpəd], *vehicle* [ˈviːkl̩], *silhouette* [ˌsɪluːˈet] や固有名詞、*Birmingham, Tottenham, Durham, Blenheim, Graham* などがある。このうちにも綴字発音の影響が現れているものがあり、*forehead* [ˈfɔːˈhed] や *vehement* [ˈviːmɪmənt] は英米共通に行われているものである。*Vehicle* は AE でのみ綴字発音 [ˈviːhɪkl̩] が認められている。地名ではアメリカにある同名のもので綴字発音が行われているものがある。*Birmingham* [ˈbɜːmɪŋ, hæm] (Ala.) は最近社会的大問題が起りあまりにも有名になった。同様のものに *Chatham* [ˈtʃæθəm] (N. Y.), *Nottingham* [ˈnɒtɪŋ, hæm] などがある。その他、固有名詞としては *Delhi* [ˈdelhɑː], *Wodehouse* [ˈwʊdhaʊs] などがアメリカで行われる綴字発音である。

(c) 本来別の音節に分れるべき *t* と *h* が綴の影響で異分析 (Metanalysis) が行われて [θ] となることがある。本来 [ˈwɔltəm] (<[ˈwɔltəm<ˈwɔlt, hæm<ˈwɔld, hæm] であるべき *Waltham* の [ˈwɔlθəm] (AE には -θæm もあり) は英米共に認められている。AE *Chatham* [ˈtʃæθəm] もこれと同じ現象である。

(8) k

(a) *Ski* はスカンディナヴィア語源で、BE では原語に従って [ʃi] とするものがごく最近まで多かったが、¹²今では綴字発音 [ski] のみとなった。AE では [ski]

のみである。sk で [ʃ] は他にないため、この綴字発音は定着してしまっている。

(9) l

(a) *Salmon* (cf. ME *samon*), *falcon* (cf. ME *faucon*), *fault* (cf. ME *faute*), *cauldron* (cf. ME *caudron*), *herald* (cf. ME *heraud*), *soldier* (cf. ME *souder*), のようなフランス語から入った語は ME では l が綴字になく、発音されることはなかった。¹³そして綴も l がラテン語に従って綴にとり入れられ、発音されるようになったのは Mod. E 初期のことであり、遅くは l のない発音が18世紀まで行われていた。AE ではこれらは *salmon* を除いてはすべて綴字発音となっている (BEでは ['sælmən] も認められている)。しかしその *salmon* の綴字発音も Kökeritz によればアメリカの食料品店ではよく聞かれると言う。¹⁴ *Almond* も *salmon* と同じく、[æ] の発音の後では l が発音されることがあるが、Kenyon-Knott によればこれは New England においてのみあ起ることである。*Alms* の綴字発音 [ælmz] は Kenyon-Knott では認めていないが、Kökeritz の学生の半数が l を発音すると言う。¹⁵ *Falcon* における伝統的発音 ['fɒkən] は英米ともに、たか匠の間にだけ行われているものである。アメリカでは綴字発音 ['fælkən] が全く定着してしまっただけであり、ニュー・ヨーク、マイアミ間の航空便 “The Golden Falcon” や、フォード自動車会社の製品 “The Falcon” は TV やラジオのコマーシャルでもすべて ['fælkən] で、それがこの綴字発音の普及に拍車をかけているらしい。¹⁶

(b) 以前は唇子音の前で黙字であった l は *Talbot*, *palfrey*, *almanac*, *Malvern* において綴字発音が英米ともに確立しており、AE では、*Malvern* の [-æɫ-] を除いて、他はすべて [-ɔl] である。*Almoner*, *halberd*, *scalp*, *Ralph* には [æɫ] が行われる。*Calm* を [kælm] とするのは substandard である。

(10) n

(a) *Kiln* は 1470年以來 *kill* の綴があり (1611年の欽定訳聖書でもそうである)、そのように発音されていた。この語から n が失われたのは *ell*, *mill*, *Milne* と同じやり方で、同化 (assimilation) が働いている。この *kiln* を [kɪɫn] とするのは綴字発音である。

(11) p

(a) ギリシャ語源の語で、語頭の p の次に n, s, t がある場合、p は普通黙

字である。英語の語頭における子音結合がそれを排除するためである。BE では *pseudo-*, *psyche-* に始る語や *t* の前では *p* が発音されることがある。しかしながら、AE ではこの綴字発音は行われていないようである。

(b) *Cupboard*, *raspberry*, *Campbell*, *Hepburn* などにおいては、*p* は後読する *b* による同化の結果発音されなくなったと言えるが、このうち *Hepburn* はアメリカでは同名の人に [-pb-] という綴字発音をするのが通例である。¹⁷

(c) 綴字 *mpt* において BE では *p* を発音しないことがある。例えば *empty*, *glimpse*, *prompt* がそれである。AE ではすべて発音する。しかしこれは綴字発音ではなく、もともと綴にも発音にも *p* がなかったものに、*p* を発音するようになり、後に綴字がつけ加えられるようになったにすぎない。Cf. *Thompson*, *Thomson*; *Sampson*, *Samson*.

(12) s

(a) *Illionois* はインディアン言葉で、フランス語に影響されて *s* はもともと発音されなかったが、アメリカ南部では [ɪləˈnɔɪz] という風に *s* を発音することが多い。また州名 *Arkansas* を [ɑˈkænzəs] と綴字通りに発音するのは今では old fashioned で、普通は [ˈɑrkən,sɔ] である。しかし、町の名として (Ark., Kan.) はその地方でのみ綴字発音が今でも行われている。

(13) t

(a) 綴字 *t* は *s*, *f* と *l*, *m*, *n* には含まれている場合には黙字となるが、このうち *often* と *pestle* には [ˈɔftən], [ˈpestl] が普通に認められている。これは Jones には the less frequent forms とされているのであるが、Kenyon-Knott には何の但し書きもないところから判断すれば、AE においての方がこの綴字発音の廣がりが大きいのと言えよう。同様に *Westminster* や *Westmorland* も AE では (英米の地名にかかわらず) *t* を発音するのが普通である。*Westmorland* の BE での伝統的発音は (今では the less frequent form であるが) [ˈwɛsm-lənd] である。また *Christmas* は BE では綴字発音 [ˈkrɪstməs] が行われることがあるが、AE には認められていない。

(b) その他、*waistband* [ˈweɪs,bænd, -bænd], *waistcoat* [ˈweɪsˈkəʊt, ˈwɛskət], *wristband* [ˈrɪz,bænd] にも [ˈweɪstˈbænd], [ˈweɪstˈkəʊt], [ˈrɪstˈbænd] が普通に用いられ、海洋語 *boatswain* の伝統的発音 [ˈbəʊsn] も定着したかに見えたか時おり綴字発音の [ˈbəʊt,swɛɪn] が聞かれる。

(c) 以上すべて発音の上で脱落してしまった *t* に restoration が働き綴字発音が再び行われるようになったものである。しかしながら, *-stle* に終る語は上にのべた *pestle* 以外, たとえば *whistle, wrestle, rustle* 等に綴字発音が行われることはない。使用頻度が関係してくるのであろう。

(14) *th*

(a) *Clothes* は約200年前から [klouz] と [klouðz] という発音の違いが意味の違いを生じて来ており, 「着物」の意では Dr. Johnson, Sheridan & Walker, Fowler などが [klouz] が正しいとして来た。BE では Jones によると [klouðz] のみが認められ, [klouz] は初版以来 old fashioned となっている。AE においては両方が認められている。

(15) *w*

(a) 伝統的発音でこの文字を発音せずに, 綴字発音の結果発音するようになったものに *swoon* がある。17, 8世紀までは [sun] が普通であったが, 現在では英米とも [swun] のみである。

(b) 弱音節で発音しなくなったもので, 再び *w* が発音されるようになったものに *toward* がある。これは比較的最近のことで, Kenyon-Knott には [prep. tord, tɔrd, tə'wɔrd] の三つが併記されている。¹⁸ 形容詞としては前二者のみしか認められていない。この綴字発音の歴史が浅いので何とも言えないが, 頻度数から見て, 綴字発音が波及することが考えられる。¹⁹ *Forward* についても同じであるが, Kenyon-Knott は “Some good speakers still use the historical pron. ['fɔrəd].” と言っている。その他 *backward, always, midwife, Edward* (cf. *Ed'ard*) は英米ともに綴字発音のみしかなく, *housewife* においては「針箱」の意味にさえ AE で ['haus, wɔf] が認められている。

(c) 地名で *-wich, -wick* その他に終るものにおいてはアメリカの地名に綴字発音をするものが多い。*Norwich* ['nɔrwɪtʃ], *Greenwich* ['grɪnwɪtʃ], ²⁰ *Warwick* ['wɔrwɪk], *Southwark* ['saʊθwɔ:k], *Southwell* ['saʊθwɛl].

II 別の音価を有する子音の伝統的発音が綴字発音になったもの

(1) *c*

(a) *Celt(ic)* は伝統的発音は ['kɛlt(ɪk)]であり, BE ではこれが一般的で綴

字発音 [ˈsɛlt(ɪk)] は稀にしか聞かれない。一方 AE では綴字発音のみである。

(2) ch

(a) *-wich* に終る地名は BE では [dʒ] が多いが、AE では普通 [tʃ] になる (黙字 *w* 参照)。Spinach も AE では [tʃ]。

この綴字 *ch* が *scheme* や *schedule* からの類推で綴字発音の [tʃ] となることが多い。*chasm* [ˈkæzm] が [ˈtʃæzm] , に *lichen* [ˈlɪkən] が [ˈlɪtʃən] 又は [ˈlɪrtʃən] に、*Charon* [ˈkærən] が [ˈtʃærən] に、*sepulcher* [ˈsepəlke] が [ˈsepəltʃə]、*Charybdis* [kəˈrɪbdɪs] が [tʃəˈrɪbdɪs] となるなど、ギリシャ語からの借入語に多い。しかし、これらはまだ substandard なものばかりである。²¹

(b) BE では *bench*, *filch*, *trencher* のように *n*, *l* の後で [tʃ] の [t] が屢々消失して [ʃ] 音になるが、AE では [tʃ] が普通である。²²

Machination は綴字発音では [ʃ] だが一般的ではない。

(3) gg

(a) *Suggest* は BE では [səˈdʒɛst] だが、AE ではむしろ [səgˈdʒɛst] が普通で、前者は less frequent である。これには *s-u-g* [es-ju-dʒi] *sug* [sʌg], *g-e-s-t* [dʒi-i-es-ti] *gest* [dʒɛst] と綴り方を教えた教師の影響が考えられる。²³

(4) ph

(a) この文字は普通 [f] をあらわすというので、後に *ph* と綴られるようになったフランス語からの借入語 *nephew* [ˈnevju] (ME *neveu*) にアメリカでは綴字発音 [ˈnefju] が用いられる。AE での伝統的発音は much less frequent である。

(5) s

(a) この文字はもともと [s] 又は [z] をあらわすものであるが、次に [ɪ], [j] などが来ると同化作用で口蓋化され、[ʃ] 又は [ʒ] となったものが多い。しかし、AE では *s* は本来 [ʃ] 又は [ʒ] を表すものではないとして、*controversial* を [ˈkɑntɹəˈvɜrsɪəl] とする人もある。また、綴がちがうが同様のことが *association* にも言うことができ、これは [əˈsɔʊsrɪˈeɪʃən] と [əˈsɔʊsrɪˈeɪʃən] が並んでいて、どちらが優勢であるか定め難い。*Negotiate* についても、この *-ti-* を [sɪ] とする人がある。*Assume* や *consume* は今では [s] のみとなっている。

(6) sc (h)

(a) *Schedule* は英米ともに綴字発音が行われる。しかし、英米において差異があり、BE では [ˌʃedʒul], AE では [ˈskedʒvɪ] である。これは、もともと [ˌʃedʒul] だったもので、[s] が [sk], [dʒu] が [dʒv] となった AE の方が綴字から離れていると言える。

(b) また、*schism*, *sciatic*, *scintillate*, *Scylla* にも [sk] が聞かれることが AE にある。*Scheme*, *schedule*, *sceptic* などからの類推であるが、いずれも使用頻度の低い語である。

(7) th

(a) *Thence*, *thither* においては [θens], [ˈθɪðə] が多く用いられる。これはもともと [ð] だったものであり、*thence* においては [ð] の方が多い。しかし、*thither* は主として文語であるために、綴字発音が伝統的な発音にとって代りつつある。

(b) *Thames* はコネティカット州にある川の名を表す時は [θeɪmz] という発音がある。これは I (7)(c) の *Waltham* と同じ現象ではなく *theater*, *authority*, *anthem*, *author*, *Elizabeth* (cf. *Betty*), *Catherine* (cf. *Kate*, *Kitty*), *Arthur* (cf. *Art*), *Theodore* (cf. *Ted*, *Teddy*) 等と同じものである。ラテン語ではギリシャ語の θ を表すのに *th* を用い [t] と発音していた。それがラテン語から直接あるいはフランス語を通して間接に英語に借入されたのである。綴字 *th* を [t] と読む場合が今でもないことはない。例えば *thyme*, *Anthony*, *Esther*, *Mathilda*, *Theresa* (cf. *Terry*), *Thomas* (cf. *Tom*), *Thom(p)son*, *Theobald* [ˈtɪbɪld], *Anthony* (cf. *Tony*), *Esthonia* 等がある。このうち *Anthony*, *Theresa*, *Esthonia* に AE で [θ] も認められており、*Theobald* はアメリカでは [ˈθiəb, ɔld] が普通のようなのである。*Mathilda* は発音によって綴の方が変えられた *Matilda* というのが英米にある。

III 綴字の影響による母音の変化

(1) a

(a) 強勢母音において *bade*, *caste*, *chastity* (cf. *chaste*), *national* (cf. *nation*), *patronage* (cf. *patron*) などに [er] が現れることがある。このうち Kenyon-Knott で認められているのは *patronage* だけであるけれども、*bade* の

[berd] も昨今よく耳にする発音でもあり、この綴字発音は案外根強いかも知れない。コネティカットにある *Thames* 川は常に [θeɪmz] である。

(b) 後に *l* が来る時に *a* は [ɔ] 又は [ɑ] と読まれることが多いが、綴字発音で [æ] となることがしばしばある。*Almond, falcon, salmon, Talbot* などその例である ([9](a)参照)。*Ralph* [rɛf] も AE では [rælf] が普通。また *Pall Mall* の [pɔl mɔl] は確立している。

(2) er

(a) *Clerk, sergeant* の *er* が [ɜ] で発音される傾向がある。これは *deserve, determine, serve, service, servant* 等のように、18世紀まで [ɑ(r)] で発音されていたのが後に [ɜ(r)] と発音されるようになったのと同じ現象である。*Start, dark, farm* などはこれとは逆に、発音によって綴が変わってしまったものである (cf. *varsity* < *university*)。地名でも *Derby, Hertford, Berkeley, Berkhamsted, Berkshire, Jervis* などはすべて AE では [ɜ] のみまたは [ɑr] と並んで認められている。

(3) o

(a) 古くは [ʊ] で発音されており後に [ʌ] となったもののうち、*come, love, some, honey, front, dozen* のような日常語は [ʌ] が固定してしまったが、一方 *comrade, combat, constable, accomplish, bombast, dromedary* のようにあまり頻度の高くない語においては [ʌ] が定着せず今では、むしろ [ɑ] であって、いずれ [ɑ] のみになってしまうと思われる。*Wont* は AE では [wʌnt] または [wount] であり、less frequent なものとして [wɒnt, want, wɑnt] があるが、この語は vernacular でないため、綴字発音になる傾向がある。[wount] は *won't* の影響が多分に考えられる。²⁵ *Frontier* は強勢が第1音節にある場合も第2音節にある場合も [ʌ] が多いが、[ɑ] も決して稀ではない。このように伝統的発音と綴字発音の勢力が伯仲している場合、綴字発音が今後優勢になる可能性が大きい。

(b) もう一つ強音節において [ɑ] で発音する *o* が [ou] となることがある。*Dolorous* (*dolor*の類推)、*sojourn, solace* がそれである。ただし *solace* の [ou] は Kenyon-Knott では認められておらず、Webster 第3版では sometimes と但し書きされている。*Provost* はアメリカの辞書ではすべて ['prəvɒst] であるが ['prəuvoust] 又は ['prəvoust] がしばしば聞かれる。これには *provost-*

marshall ['prouvou'marʃəl] の影響が考えられる。²⁶これらの現象はⅢ(1)(a)のものと音声学的には同じものである。

(4) 弱音節における母音の綴字発音

(a) *-ar, -er, -ir, -or, -our, -ur* に終る語は18世紀あるいはそれ以前に [ə] 又は [ɚ] となっていた。弱音節におけるこれらの母音を綴字に忠実に発音し分けることは馬鹿げたことである。²⁷アメリカにこの綴字発音がよく聞かれるのは“correct” pronunciation を主張する教師や牧師の影響が考えられる。これは聞き手によく分ってもらふ必要のある演説者においても同じで、冠詞 *a, the* をすべて [er], [ði] とやるのは彼等である。²⁸

(b) 接頭語 *be-, de-, e-, re-, se-* の [ɪ], [ɪ], [ə] が [i] になるのも綴字発音と言えるが、この傾向は強い。

(c) 接頭語 *con-, com-* においても [ə] を [ɑ] と発音する人達がいる。

(d) 接頭語ではないが、*vacation* の第1音節を [er] とするのはむしろ普通である。

(e) *-day* を伴う複合語においては、*-day* には強勢がなく [dɪ] となるのが普通であるが、AE では [der] とされることも少くない。Kenyon-Knott では *Sunday, Monday* のような曜日の名前には [dɪ] だけしか認められていないが、Webster 第3版では [der, dɪ] 両方認め、前者の方が主要なものとされている。Kenyon-Knott は *holiday* には [der] のみを認めている。Kenyon-Knott だけから判断すれば *holiday* は曜日の名に較べると頻度が低く、複合語という意識も伴って [der] のみを認めているのかも知れない。この *-day* の [der] は AE では第2強勢を与えられて勢力を持つことになるだろう。

以上、アメリカ英語の綴字発音を考察して来たわけであるが、すべてを尽しているとは言いきれない。例えば *always* ['ɔlwɜz], *placate* ['plɜkət], *coxwain* ['kɔksweɪn], *perhaps* [pə'hæps] その他多数のものが残っている。しかし、その残っているものの多くは弱音節における母音であることがわかる。

綴字発音は初めにも述べたようにそれぞれの語の日常生活で用いる頻度数に関係してくるので generalize して述べることは困難である。しかし以上の考察から AE の綴字発音について generalize できるものを整理すると、

1. 本来あるいは同化によって黙字である子音綴字が発音されるようになっていくことが多い。

2. 子音は本来その綴字が持っている音価で発音されることが多い。
3. 母音では日常語として頻度数の高い語は伝統的発音を保持することが多く、それと同じ語源の言語に属するものや同じ音声環境にあるものであっても頻度が低ければ綴字発音が行われる。
4. 固有名詞ではアメリカでは同名のものを綴字発音する傾向がある。
5. あいまい母音化してしまった弱音節の母音が第2強勢を持ち綴字発音が行われる傾向がある。

このうちとくに AE の特徴となっているのは4である。しかしながら、本来母音が発音されていて今では脱落し、次に来る *l*, *m*, *n* などが syllabic consonant となっている場合には、その前の母音字を綴字に従って発音することはあまり行われていないようである。

綴字が固定する一方発音が変化している時に綴字に従って発音することは多くの場合人工的な逆行であるが、綴字が固定してしまっている限り、その逆行への努力がたえず繰返されることであろう。綴字改良の問題が起ってくるのはこうしたことが原因となっている。しかし、綴字を改良したところでたえず変動を続けている発音の方は再び綴字とはちがった方向へと逃げて行ってしまうことは明らかである。合理的な場合もあるが、少数の場合を除いては綴字発音は自然な発音の流れにさからうものであって決して賢明なものとは言えない。時によっては時間と精力の労費でもある。綴字発音にたよるべき時は Kökeritz の言うように *inner* と *inter-*, *winter* と *winner*, *futile* と *feudal*, *parity* と *parody* が homonyms となって区別がつかなくなった時こそその好時期であろう。²⁹

注

- 1 安井稔『英語学研究』研究社。1960. p. 19.
- 2 Helge Kökeritz, "Spelling-Pronunciation in American English," In *Honour of Daniel Jones* ed. by David Abercrombie, D. B. Fry, P. A. D. MacCarthy, N. C. Scott, and J. L. M. Trim, Longmans, Green & Co. Ltd., London, 1964, pp. 139—40.
- 3 John S. Kenyon, *American Pronunciation*, 10th edition, Wahr, Ann Arbor, 1950, p. 114.
- 4 George Philip Krapp, *The English Language in America*, Appleton-Century-Crofts, New York, 1925, II, p. 20f.
- 5 Kökeritz, *op. cit.*, p. 140.
- 6 John S. Kenyon & Thomas A. Knott, eds, *A Pronouncing Dictionary*

- of *American English*, G. & C. Merriam, Springfield, Mass., 1953.
- 7 ただし、同方式の [o] は [ou] に、[e] は [er] に書き改めている。
- 8 Daniel Jones, *English Pronouncing Dictionary*, 12th edition, Dent, London, 1963. [以下とくに断らないかぎり、Jones とあるはこの版を指す]
- 9 英米の方言にはよく *perfit* や *verdit* が見られる。
- 10 Cf. 安井稔, *op. cit.*, p. 21.
- 11 Cf. 安井稔, 『音声と綴字』(英文法シリーズ・第2巻), 研究社, 1955, p. 26ft.
- 12 Jones, *op. cit.*, 1st and revised editions.
- 13 これらのいくつかは今でもアイルランドやスコットランド方言で *l* のない発音が一般に行われている。Cf. 拙稿「アイルランド英語の発音」『人文研究』第17巻 第1号 p. 119.
- 14 Kökeritz, *op. cit.*, p. 141. これは hypercorrection のため [ˌsɑmən] となる傾向がある。
- 15 Kökeritz, *op. cit.*, p. 143.
- 16 Kökeritz, *op. cit.*, p. 137.
- 17 安井稔, *op. cit.*, p. 47ft.
- 19 Jones 初版は [tɔ:d] が普通としてあげられ、[tə'wɔ:d, tu'wɔ:d, twɔ:d] は the less frequent forms とされているが、第12版では [tə'wɔ:d] が普通で [tu'wɔ:d, twɔ:d, tɔ:d, tɔəd] が less frequent forms となっている。
- 20 ただし New York の *Greenwich Village* は [ˈɡrɛnrɪʃ] が普通。
- 21 Arthur J. Bronstein, *The Pronunciation of American English*, Appleton-Century-Crofts, New York, 1960, p. 233.
- 22 安井稔, *op. cit.*, p. 18.
- 23 Kökeritz, *op. cit.*, p. 137.
- 24 方言で [ɑ(r)] が残っていることがある。拙稿, *op. cit.*, p. 125 参照。
- 25 Kenyon-Knott, *op. cit.*, *wont*.
- 26 Kökeritz, *op. cit.*, p. 142.
- 27 Kenyon, *op. cit.*, p. 200.
- 28 Kökeritz, *op. cit.*, p. 138.
- 29 Kökeritz, *op. cit.*, p. 144.